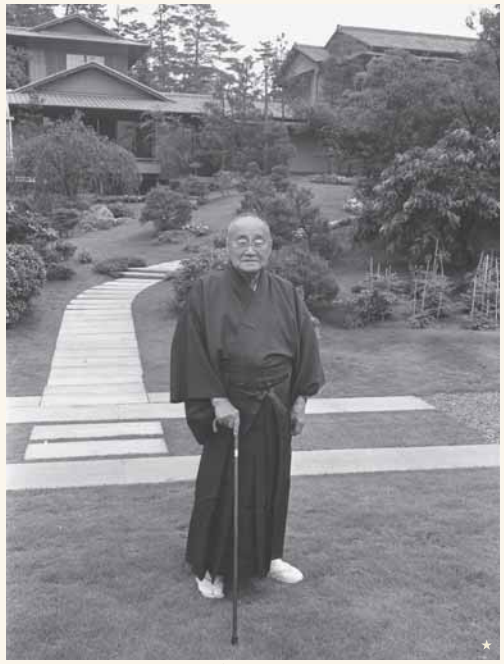
旧吉田茂邸とは

旧吉田茂邸は、明治 17 年に吉田茂の養父吉田健三が別荘として建てたもので、吉田茂が昭和 19 年頃から、その生涯を閉じる昭和 42 年までを過ごした邸宅です。

政界引退後も多くの政治家が「大磯詣（もうで）」を行い、また、元西独首相アデナウアー氏や、当時の皇太子殿下と同妃殿下など、国内外の要人が招かれました。吉田茂没後には、大平首相とカーター大統領の日米首脳会談が実施されるなど、近代政治の表舞台としても利用されました。

豪壮で近代的な数奇屋檜造（すきやひのきづく）りの本邸は、建築家吉田五十八（よしだいそや）の設計のもと、京都の宮大工により建築されました。日本庭園は、世界的作庭家、中島健（なかじまけん）が設計したもので、本邸周辺部分は、日本庭園研究家の久恒秀治（ひさつねしゅうじ）によって造られました。

吉田茂がよく散歩をしていたといわれる庭には、心字池や築山のある日本庭園、松林、竹林のほか、バラ園、サンルームがあります。また、日本庭園にはあまり用いられないカナリーヤシが植えられるなど、海外赴任生活の長かった吉田茂の嗜好の多様性、様式にとらわれない人間性が色濃く反映された庭園となっています。



吉田茂と本邸（昭和41年６月撮影）
吉田五十八によるモダンな数奇屋建築と、中島健による明るくシンプルな日本庭園が調和した景観を形づくっています

吉田茂

吉田茂（明治 11 年～昭和 42 年）は、戦前に外務官僚として諸外国での領事、書記官、大使などを歴任し、戦後は通算5期（7年2ヶ月）にわたって内閣総理大臣を務めた著名な政治家です。

この間、昭和 26 年には、サンフランシスコ講和条約の締結を実現し、日本の国際社会への復帰を果たすなど、戦後復興に尽力し、社会の在り方を方向付ける役割を担いました。

また、吉田茂は、池田勇人や佐藤栄作など、多くの後進を育ててきたことでも知られ、本邸は彼ら「吉田門下生」がよく訪れていた場所でもあります。

中島健

中島健（大正3年～平成 12 年）は、吉田茂をはじめ、田中角栄、河野一郎らの邸宅の庭園など、政財界の要人の庭を設計施工した作庭家です。吉田五十八との協働で日本芸術院会館日本庭園（昭和33年）と玉堂美術館庭園（昭和36年）、オーストラリア・カウラ日本庭園などを手がけています。

草花をうまく使い、西洋の水彩画のような色彩豊かな、シンプルモダンな日本庭園づくりが特徴で、造園界の数々の表彰だけでなく、昭和 59 年には外務大臣から、造園を通じて諸外国と相互理解を深めたとして表彰され、昭和 62 年に勲五等双光旭日章（くんごとうそうこうきょくじつしょう）を受けました。

久恒秀治

日本庭園の研究家として知られますが、久恒が作庭した事例はあまり知られておらず、旧吉田茂邸周辺部分の庭は貴重な存在と言えます。

■旧吉田茂邸地区の沿革

明治 17（1884）	養父吉田健三が大磯の地に別邸を建てる。
昭和 19（1944）	戦況が悪くなり、平河町の自邸から大磯へ居を移す。
昭和 20（1945）	終戦の玉音放送を大磯で聴く。 同年、外務大臣に就任。（麻布の外相公邸に住む）
昭和 21（1946）	内閣総理大臣に就任（68 歳）。これより平日は首相公邸、週末に大磯へ帰る生活が始まる。
昭和 29（1954）	内閣総理大臣を辞任。内門が完成し、東側からのアプローチを廃し、現在のアプローチとなる。内門（兜門）が完成。
昭和 34（1959）	この頃、ほぼ現在の敷地となる。
昭和 35（1960）	伊藤博文邸にあった五賢堂を吉田邸に移す。 元西独首相アデナウアー氏が訪問。
昭和 36（1961）	金の間、銀の間の増築。この頃、日本庭園が完成する。
昭和 37（1962）	吉田茂が五賢堂に西園寺公望（さいおんじきんもち）を合祀する。
昭和 38（1963）	政界を引退する（85 歳）。サンルームの増築。
昭和 39（1964）	数寄屋建築の主屋（食堂等）が完成。
昭和 41（1966）	皇太子殿下、同妃殿下ご来訪のため、内門から車が入れるよう轍（わだち）を設置。玉砂利敷きだった玄関アプローチに敷石を敷設。
昭和 42（1967）	10 月 20 日、二階寝室（銀の間）で永眠（89 歳）。 佐藤栄作の名により合祀され、七賢堂となる。
昭和 44（1969）	西武鉄道へ売却され、大磯プリンスホテル別館として管理される。
昭和 54（1979）	大平正芳／ジミー・カーターの日米首脳会談が開催。バラ園は駐車場化され、規模を縮小した。
平成 18（2006）	旧吉田茂邸の保存・活用に向けた要望書が約５万人の署名をもって、国及び県に提出され、神奈川県が大磯城山公園の拡大として県立都市公園化を決定。
平成 21（2009）	3月 22 日の未明、火災により旧吉田茂邸が焼失。 敷地の大部分を大磯城山公園の拡大区域として都市計画決定。
平成 25（2013）	約1.8ha部分開園。
平成 29（2017）	約3.0ha全面開園。旧吉田茂邸開館。

県立大磯城山公園「旧三井別邸地区」の概要

県立大磯城山公園「旧三井別邸地区」は、湘南丘陵の先端部にあり、明治時代の三井財閥別荘跡地に整備された公園です。当時の面影を感じさせる小径や蔵、三井家の茶室として置かれていた国宝「如庵」にちなんで建てられた茶室「城山庵」、大磯町郷土資料館や横穴式古墳群などがあります。展望台からは相模湾をはじめ富士山、箱根、伊豆半島の山々などが一望できるほか、茶室「城山庵」では抹茶を楽しむことができ、紅葉時期にモミジのライトアップが行われるなど、大磯地域の歴史や文化、自然に親しむことができます。

展望台

11月のモミジライトアップ

城山庵

利用案内

■旧吉田茂邸地区

・開園時間：午前9時から午後5時まで（入園は午後4時45分まで）
※上記時間外及び年末年始は閉園します

■旧吉田茂邸（大磯町郷土資料館別館）

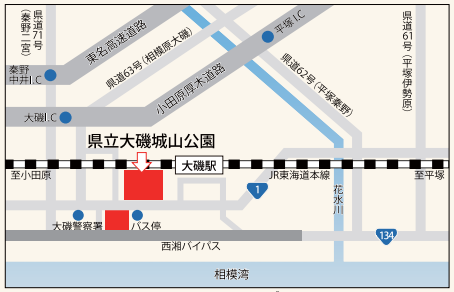
・開館時間：午前9時から午後4時30分まで（入館は午後4時まで）
・休館日　：月曜日・毎月1日・年末年始（12月29日～1月4日）
・観覧料　：一般500円（450円）中・高校生200円（150円）
※カッコ内は20名以上の団体料金です

駐車場

		第1駐車場	第2駐車場	第4駐車場
収容台数		普通車　34台 身障者用　2台 計　36台	普通車　17台 身障者用　2台 計　19台	普通車　23台 身障者用　1台 中型車以上　2台 計　26台
利用時間		8:30～17:00	8:30～17:00	9:00～17:00
料金	土日祝日	普通車 1時間300円 以降30分毎150円	無料	普通車 1時間300円 以降30分毎150円 中型車以上 1時間1200円 以降30分毎600円
	平日	無料	無料	無料
年末年始		12月29日～1月3日 無料	12月29日～1月3日 無料	12月29日～1月3日 閉場

※障害者手帳を提示すると、駐車料金が減免されます。

アクセス　ＪＲ東海道本線大磯駅から
磯07・磯13・磯14・平47系統　バス10分
「城山公園前」下車徒歩３分



アクセスマップ

■公園のお問い合わせ先
県立大磯城山公園管理事務所
〒259-0111　大磯町国府本郷551-1
TEL　0463-61-0355

■旧吉田茂邸のお問い合わせ先
大磯町郷土資料館
〒255-0005　大磯町西小磯446-1
TEL　0463-61-4700

（大磯町郷土資料館所蔵）

写真提供
☆…「写真集吉田茂」（撮影 吉岡専造、発行：（財）吉田茂国際基金、中央公論新社）
＊…竹内三郎氏
※…公益財団法人 神奈川県公園協会

神奈川県
平塚土木事務所道路都市課
〒 254-0073 平塚市西八幡 1-3-1 電話 0463-22-2711（代表）

平成 30 年 6月

神奈川県
平塚土木事務所

県立大磯城山公園
旧吉田茂邸地区

戦後を代表する内閣総理大臣　吉田茂の足跡をたどり
歴史と自然、文化を体験する場所

神奈川県平塚土木事務所

旧吉田茂邸地区の公園整備事業概要

■背景と経緯

相模湾沿岸地域一帯は、明治期から別荘地・保養地を形成し、首都圏で活躍する政財界人や文化人が滞在、交流する地域として発展してきました。特に大磯町中心部一帯は、旧吉田茂邸をはじめとして、大規模でかつ著名人が構えた邸宅・庭園が連なっています。

旧吉田茂邸は、吉田茂の没後、西武鉄道株式会社へ売却され、大磯プリンスホテルの別館として利用されていました。平成 16 年頃より地元を中心に旧吉田茂邸の保存の機運が高まり、神奈川県や大磯町により近代政治史の歴史的文化遺産として保全・活用することが検討されました。そして、平成 18 年に隣接する「県立大磯城山公園の拡大区域」として、県が整備する方向性が定められましたが、その後の計画検討の最中、平成 21 年3月、本邸が火災で焼失してしまいました。しかし、焼失を免れた日本庭園や歴史的資源（内門・七賢堂等）、そして大磯丘陵に連なる貴重な緑地を保存活用するため、同公園の拡大区域とすることが再確認され、 平成 21 年7月の都市計画の位置付けのもと、同年に本区域の事業に着手しました。

旧吉田茂邸については、大磯町が神奈川県から都市公園法の設置許可を受け、町有施設として再建しました。

なお、歴史的経緯から、本公園の既開園区域を「旧三井別邸地区」、拡大区域を「旧吉田茂邸地区」としました。

焼失後の旧吉田茂邸（平成21年）

■「旧吉田茂邸地区」の公園像

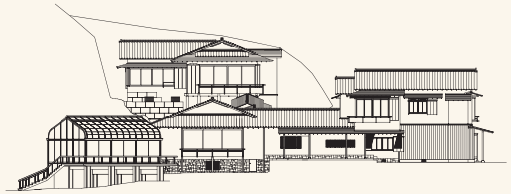
「宰相・吉田茂を通して、大磯の風土と当時の歴史、文化を体験できる邸園」

実際に吉田茂が暮らしていた場で、当時の生活、エピソードなどを通して、戦後政治史を見聞し、ひいては大磯の自然、歴史、文化を体験できる拠点とします。

■「旧吉田茂邸地区」整備にあたって重視した視点

「庭園と一体となった景観イメージの再現」

・庭園からみた庭園と建物の一体的な景観を確保し、吉田茂の生活空間や戦後政治史の舞台となっていた空間を再現しました。
・建物だけでなく、庭園を含めたこの敷地全体が、吉田茂の愛した場所であり、これを一体的に再現するものです。そのため、都市公園として新たに整備する施設を最小限にとどめるため、当時なかった施設は極力設置していません。



平成19年の様子

■整備の進め方

整備にあたって、神奈川県では、大磯の歴史や文化を生かした魅力あるまちづくりに寄与するため、専門家の意見を十分取り入れながら、吉田茂存命期の昭和 41 年当時と同じになるよう、再建する建物と日本庭園が一体となった景観づくりを進めました。また、大磯町とは、建物と庭園の一体的な利活用について検討を行いました。

日本庭園や松林、内門、バラ園など当時から残る施設については、資料に基づき、復原や修復を行うとともに、駐車場や管理休憩棟など新たな施設については現行法令を厳守しつつ、本区域及び周辺の景観に配慮した整備を行いました。 特に色彩については消灰色（チャコールグレー）や、こげ茶（ダークブラウン）といった落ち着きのある色を優先的に採用しました。

■事業概要

公園名	：県立大磯城山公園	利用開始	：昭和 62年 4月 26日（面積約 2.0ha）
公園種別	：風致公園		平成　2年 4月　1日（面積約 7.0ha）
所在地	：中郡大磯町国府本郷、西小磯		平成 25年 9月 22日（面積約 8.8ha） 旧吉田茂邸地区 部分開園 約1.8ha追加
都市計画決定面積	：旧三井別邸地区　約 7.0ha 旧吉田茂邸地区　約 2.9ha		平成 29年 4月　1日（面積約10.0ha）旧吉田茂邸地区 旧吉田茂邸地区 全面開園 約1.2ha追加
都市計画決定	：当初　昭和 58 年　12月 23 日 最終　平成 21 年　7月 28 日 （旧吉田茂邸地区拡大）		

大磯城山公園
―旧吉田茂邸地区―
公園整備の概要

公園整備にあたっては、吉田茂が存命した昭和41年頃の景観に再現することを目指し、庭園や内門の復原、バラ園整備、松林の再生を行うとともに、サンルームや、七賢堂は保存し、焼失した旧吉田茂邸は大磯町が再建しました。

また、公園に必要な機能として、管理休憩棟、駐車場、バリアフリー対応園路等を整備しました。

ここでは各施設の整備方針と整備内容を紹介します。

昭和41年頃の様子

昭和41年の皇太子ご夫妻のご来訪に際し、内門からアプローチまで御車で入っていただくため、轍(御影石)がつくられました。実際は車ではなく歩いてお入りになられました。

日本庭園

昭和36年頃に完成した日本庭園は、中心となる心字池を邸宅の正面に配置した、池泉回遊式※の庭園です。庭園設計者である中島健は、数奇屋建築の本邸との調和や花を愛した吉田茂の嗜好をふまえ、様々な草花やツツジ類、ウメなどを多く取り入れ、色彩豊かな庭づくりをおこなったと考えられます。

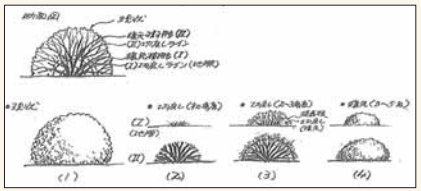
年月を経て庭全体で樹木が大きく生長し、風格がでてきた一方で、中低木の肥大化により、本来の空間構成や景観が損なわれていたため、建物と一体となった庭園を創出した昭和40年代当時の景観の復原を目標として整備を行いました

※池泉回遊式庭園：日本庭園の形式の一つで、大きな池を中心に、その周囲に園路を巡らして、築山、池中に設けた小島、橋、名石などで各地の景勝地を再現し、周囲を回遊して鑑賞する庭園。

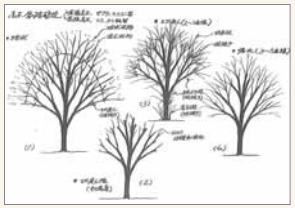
アプローチ周辺は、ツツジ類が肥大化し、ウメの枝が茂りすぎて見通しが悪い状態となっていた

ツツジ類の強剪定を行い、開放感と奥行きを取り戻し、心字池とつながりのある景色を取り戻しました

庭の復原にあたっては、庭園内の樹木すべてを調査したうえ、昔の写真などから樹形を比較し、中島健の作庭手法を確認しながら、樹種別、中低木・高木別に剪定計画をつくりました。



低木剪定



高木剪定

内門（兜門）

サンフランシスコ講和条約締結を記念して建てられた門で、別名「講和条約門」ともいわれます。また、軒先に曲線状の切り欠きがあり、兜の形に似ていることから「兜門」とも呼ばれます。

京都の裏千家の兜門と同じ製作者を京都から呼び寄せて造られ、昭和29年に完成しました。屋根は「檜皮葺き」という、清水寺や出雲大社でも見られる伝統的技法が用いられており、消失を免れた貴重な建築物です。

昭和57年に葺き替えがされていましたが、屋根や壁、建具などの老朽化が著しかったため、平成23年度に歴史的・文化的資源の保存を目的に、伝統的工法を用いて修復しました。

修復前の屋根は原形を留めないほど腐朽が進行していました

檜皮、板、垂木を解体し、状態の良い旧材を再利用しながら修復しました

修復後の内門（屋根面積：34㎡ 建築面積：9.44㎡）

修復中に屋根裏から発見された棟札

生木から採取・整形された檜皮を水で湿らせ、屋根を葺いていきます

旧材を再利用して、棟瓦を葺き直しました

バラ園

昭和36年頃、日本庭園作庭とほぼ同じ時期、現在の駐車場の敷地に、バラ園がつくられました。このバラ園は吉田茂の自慢であり、「プリンセスミチコ」がここで栽培され、全国に広まったことでも知られています。この他にも、バラ愛好家が欲しがる品種が多数植えられていたと伝わっています。

バラ園の敷地は、昭和54年のカーター大統領・大平首相の日米会談で旧吉田茂邸が利用された際に駐車場化され、面積は大きく縮小しました。

公園整備にあたって、プリンセスミチコをはじめ、吉田茂存命時に存在した品種をリスト化して再び植栽し、当時の雰囲気を演出しています。

プリンセスミチコは、濃いオレンジ色の八重咲き中輪の花が咲く品種で、皇太子ご成婚を記念し、贈られたと言われています。

吉田茂存命時に存在した主な品種

- ピース
- マーガレット
- ホワイト・ゴールド
- シャルル・マレラン
- スパニッシュ・ビューティー
- プリンセス・ミチコ
- プリンセス・セツコ
- コンラッド・アデナウアー
- エリザベス
- ケネディー・フジ
- ケネディー
- マダム・バタフライ
- ピノキオ
- ホワイトピノキオ
- ゴールデンドン
- マリア・カラス

エノキの大木

心字池と管理休憩棟の間にエノキの大木があります。吉田茂は、庭師に頼み、本邸二階から見えるこのエノキの枝先を水平に刈り込ませ、その視線延長上にある富士を際立たせて見せるようにしたと言われています。二階の金の間からは、近景として日本庭園があり、中景として松林、遠景として箱根連山とその向こうに富士山と、「近～中～遠」の景を同時に楽しむことができたため、吉田茂はこの景色を最も愛していました。

剪定したエノキの大木

カナリーヤシ

内門から日本庭園に入った正面奥に、大きなカナリーヤシがあります。日本庭園で用いることのないこのヤシは、神奈川県議長から吉田茂へ贈られ、中島健の指示のもと、植えられたと言われています。

吉田茂銅像

昭和58年に地元の有志の方々によって建立されました。サンフランシスコ講和条約締結の地、サンフランシスコと首都ワシントンの方角に顔を向けて設置されたと言われています。銅像付近からは眺望が良く、富士山、伊豆半島、相模湾などを一望できます。

邸地区マップ

醤油釜

竹林の近くにある大きな釜は、吉田家に伝わる醤油釜です。吉田茂の養父で、実業家であった吉田健三は、醤油製造業も手がけていたと言われています。

釜の縁には、舎 の屋号が記されています。

サンルーム

旧吉田茂邸の離れのような形で、庭の池に張り出すように、当時珍しかった曲面ガラス張りのサンルームがあります。室内には熱帯植物のほか、ソファーやテーブルが置かれていました。

このサンルームは、耐震上の課題から、人が入ることができないため、外観保存としています。

七賢堂

元々、明治36年に伊藤博文が、明治維新の元勲のうちの岩倉具視・大久保利道・三条実美・木戸孝允の4人を祀った四賢堂を、自身の邸宅「滄浪閣」に建てたものでした。伊藤博文の死後、梅子夫人により伊藤博文を加えた5人が祀られ「五賢堂」となりました。昭和35年に吉田茂邸に移設され、昭和37年に吉田茂が西園寺公望を合祀し、吉田茂の死後、昭和43年に佐藤栄作の名によって吉田茂が合祀され、「七賢堂」となりました。

内門やサンルームとともに、焼失を免れ、旧吉田茂邸の歴史を感じさせる貴重な建築物です。

正面の扁額「七賢堂」の文字は、佐藤栄作元首相が書いたものです

菜園広場

かつて菜園として利用されていました。戦時中はサツマイモや野菜、戦後はイチゴや陸稲のモチ米が栽培され、正月の餅用としていたと言われています。

公園整備では、来園者が休憩できる広場としました。

駐車場

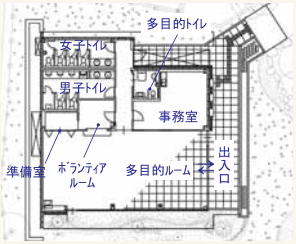
普通車23台、身障者用1台、バス2台分を確保した駐車場です。既存のウメの保存、正門から車が少しでもみえないように配置するなど工夫しました。また、植栽帯には当時植えられていたバラを植えています。

管理休憩棟

日本庭園を眺める場所に管理休憩棟を整備しました。当時にはない新たな建物であり、再建した旧吉田茂邸と異なるデザインとし、また、旧吉田茂邸からの眺望に違和感がないものとなるよう配慮しました。

屋根には太陽光発電パネル（15kW）を設置しています。

管理休憩棟の外観　　（平成25年5月完成
主要構造：軽量鉄鋼造、屋根材：ｶﾞﾙﾊﾞﾆｳﾑ鋼板、
建築面積：216.55㎡、延床面積：174.70㎡）



多目的ルームは、日頃の来園者の休憩のほか、大勢の県民イベントや講座などに活用できるスペースです

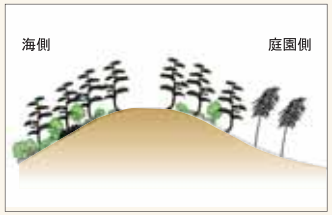
松林

海側の小高い丘には、日本庭園を屏風のように囲み、海風を和らげていたクロマツ林が広がっていましたが、昭和40年代に全国に広がった松くい虫により衰退してしまいました。

潮害から庭園内の植栽を守るため、長期的なクロマツ林の再生に取り組んでいます。

植栽した耐性マツ

初期整備として、害虫に耐性のあるマツと、飛砂防止のための中低木や地被類を植栽しました。
竹林は、潮害を防ぐため現状のまま維持しています。



松林が潮害を防ぐ程度に育ったら、クロマツを植栽します。隣接する竹林は、一部を残して伐採し、クロマツを植栽します
将来的に高木層のクロマツ、中低木、地被類で構成される複層林として、環境圧に耐えられる新たな松林景観を目指します

旧吉田茂邸

焼失した旧吉田茂邸については、多くの寄付金が寄せられ、大磯町が再建しました。

再建工事は県が受託し、焼失以前に行った詳細調査結果を基にして、建設資材の色調、風合い等を確認し、当時の写真と比較しながら作業するなど、可能な限り焼失前の趣きに近付けるよう取り組みました。

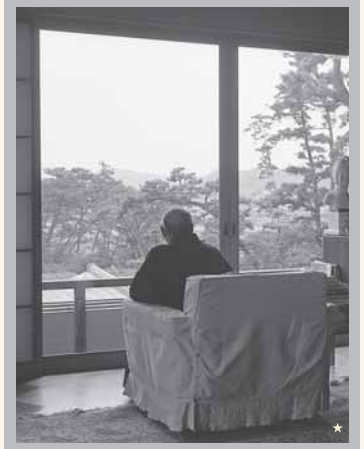
焼失後の状況

再建した旧吉田茂邸
（建築面積：602.57㎡、延床面積：743.38㎡）

「松籟庭」とよばれたクロマツ林

かつて吉田茂が「松籟庭」と呼んだほどのクロマツの林が広がっていました。この松林は、海風を和らげる機能があるとともに、日本庭園を屏風のように囲み、心字池の背景となる重要な要素を担っていました。

松籟庭の「籟」とは、簫のことで、笛を意味し、松林を吹き渡る海からの風の音を意味していると思われます。



２階の居間から松林方面を眺める吉田茂

園路

日本庭園や菜園広場から海側の松林の丘や吉田茂銅像を巡るルートには、バリアフリー対応として、スロープ園路を整備しました。